

仕事満足度に対する産業の効果

——SSM2015 データを用いた計量アプローチ——

同志社大学大学院 稲元洋輔

1 目的

労働の基盤となる産業という枠組みは、労働者にとって何を意味しており、どのような影響をもたらすのだろうか。こういった関心を基に、この研究では労働者の仕事に対する意識（具体的には仕事満足度）と産業分類の関係について検討していく。

これまでの仕事満足度についての計量的な研究では、産業といったカテゴリーがあまり用いられてこなかった。その理由として考えられることは、分析のうえで職業や従業上の地位というラベル（変数）の方が強い特徴を持つからであろう。産業とはその職業などを内包する複合的な概念であり、労働者に対してなんらかの影響を及ぼすには間接的である、と捉えられてきたのではないだろうか。しかし、産業も職業などと同じく労働者の属性を表すものの1つであることは間違いない。したがって、本研究では職業や職務の特徴を考慮しつつ、産業（分類）の効果について確認しその意味を考察する。

2 方法

使用するデータは、「2015年社会階層と社会移動全国調査（SSM調査）」である。労働者が属している産業の違いに注目し、その労働者の仕事に対する満足度について差異がみられるのかといったことを計量的に分析していく。使用する主な変数は、産業、職業、企業規模、雇用形態、年収、労働時間などである。まず産業分類による記述統計から概観を確認し、その後、満足度に対するそれぞれの独立変数の単純効果を検討する。最後に産業の効果はどのようなものであるのかについてマルチレベル・モデルを用いて分析を行い、産業内の雇用形態比率の観点から解釈する。

3 分析結果と結論

分析の結果、産業の違いによって労働者の仕事満足度に差異がみられた。全体では「電気・ガス・熱供給・水道業」、
「教育、学習支援業」で働く人びとの満足度は高い傾向にあり、これは職業などの他の変数とは独立した効果であった。さらに、産業を職業などの枠組みとしてマクロに捉えた場合、その職業や職務の特性、労働条件などによって説明される満足度に対して、産業という分類自体が直接的な効果を持つことが確認された。また、性別ごとの分析では異なる効果も示した。

労働者にとっての産業は単なる枠組みでなく、それ自体が階層性を持つものであり、どの産業に属しているかによって満足度は変化するといえる。つまり産業の影響は、職業や雇用形態がどのような状態であったとしても存在するものであり、それは性別によって異なる意味を表している可能性が示唆された。

付記 本研究は JSPL 科研費特別推進研究事業（課題番号 25000001）にともなう成果の一つであり、本データ使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た。